

# 解題 水野正好先生とまじなひの世界

狭川真一

数多い水野先生の論考の中から、まず広義のまじなひに  
関係すると思われるものを抽出し、さらにそこから少し平  
易に書かれていると判断したものを十数編に絞り込んだ。そ  
の上で、先生自らが本書の刊行をイメージされていたかの  
ような「まじなひの世界・事始」の論考を序に据えて、そ  
の他を大きく二つにまとめた。

まず前半に「まじなひ入門」の章を置いて、さまざま  
まじなひについて学ぶこととし、後半に「呪符と呪儀」と  
いう、一部では今も我々の身近にあるまじなひ世界につい  
て学べるように区分した。

さて、本書に収載した各論考については、生前、水野先  
生ご自身が各論考を要約し、短くまとめられた資料が残っ  
ている。どうやら奈良大学に大学院を設置することに伴い、

当時の文部省へ提出するために書かれた必要資料の下書き  
のようである。平成四年（一九九二）三月刊行分までが記載  
されていて、幸いにも本書に収載した論考はすべて含まれ  
ていた。本来なら私が解題を記さねばならないところだが、  
先生ご自身の言葉で論旨や執筆の意図を簡潔にまとめられ  
たものであり、それぞれの論文への想いが伝わっていると  
いう意味でも、これをそのまま掲載することにした。

掲載にあたり原文をできる限り活かすため、水野先生独  
特の仮名遣い、送り仮名も含めて残された下書き原稿その  
ままとし、若干の読点を加える程度に留めた。したがって、  
本文中では統一により消えてしまった、たとえば人面墨描  
土器などの文字もそのまま残されている。

## 序

### ◎まじなひの世界・事始

研究者の全くないまじなひで世界をどのように復原するのか、その言触れとして、すでに検討をおへていた分析について全般を見通しながら判りやすく説明し、その体系を概略示した。

### I まじなひ入門

#### ◎古代の祭礼と儀礼

従前、都市としての平城京、律令制下の各地の官衙をめぐっては宗教的に問われることは乏しかった。仏教や神道とは異なる道教的―陰陽道的な祭礼・儀礼を殺馬漢神、人面墨書土器と祓流し、福德神をめぐる祭礼などをとりあげ、具体的にその内容をのべた。

#### ◎漢礼 道教的世界の受容

中国で発達した組織的な道教はそのままの姿では日本に伝わらない。道観も道士も姿をみせない。しかも陰陽道という名で呼ばれる以前の道教的な世界は、中国の日常的な道教が中心である。こうした道教的な世界を「漢礼」という用

語で表現すればいいといた。

#### ◎古代の笑ひに

日本古代の笑ひが如何なる役割を果すものであるか、縄文仮面の笑ひを呼ぶ表情や埴輪人物中の楯持人の顔の表情、農夫婦の田遊びに見られる笑ひの表情を通じて、笑ひが疫鬼を却け、陰気をはらひ、光明世界をもたらすと考えられていたことを詳細に語った。

#### ◎戯画

奈良時代の戯画と呼ばれる資料を集成し、その背景にある心性をといた。人面墨書土器と呼ばれる壺や皿型土器の絵画が疫鬼を中心とする祓流しの絵であること、別に呪詛の絵画資料とみなされる秋田城発見の弓矢と係る人像など種々相を示した。

#### ◎人面墨書土器

平城京や河内で発掘される人面墨書土器の例が増加。その大部分が小壺であることに注目し、延喜式やその他の史料からその祓えの贖(あがなへ)の小壺としての用途を導き、さらに描かれた人面と酔胡従面も対比し、疫鬼―流行神の表情であろうとした。

## ◎古代のまじなひ世界

古代の刀剣を中心にその象嵌銘文などを通じて、いかに天皇と刀剣がまじなひ世界でつながっているか、また金装横刀や銀人を用いる大祓の東・西文部の働きがこうした刀剣とまじなひ世界をいかに雄弁に語るか、他の資料も加え、古代のまじなひを記した。

## ◎中世まじなひ世界の語りかけ

中世の僧侶、貴族の日記を中心に日常生活の中で反復される日ごとの定まった呪儀、或ひは何十年間に及ぶ定期的に実修される呪儀をとりあげ、その性格や、生活に占める位置を与え、その呪儀の内容などを具体的に考古学の成果をも加えて記した。

## II 呪符と呪儀

### ◎触穢札と神事札と

触穢時に樹てられる触穢札、神事のための浄化時に樹てられる神事札の内容を記録から復原し、穢・浄空間の扱い、意識の相違をとりあげた。また両札の間に見られる共通性を指摘し、併せて両札が対構造をなすものであることをの

べた。

### ◎鬼神と人とその動き

呪符や呪法書の中にはおびただしい鬼神の姿がたどれる。こうした鬼神がどのような容貌をもち、どのように日常生活の中に潜み、人々の生活を侵犯しているのか、病気や貧しさに対応する一鬼の働きに対応する人の動きを追求し、人と鬼の関係をあとづけた。

### ◎蘇民将来札とその世界

中・近世をいづる蘇民将来の信仰を汎日本的視野から検討し、その展開、分化の流れを追った。とくに蘇民将来をめぐる牛頭天王、天刑星、波梨采女、八万四千六百五十四神王などの神統譜や、札の形状の分化などについて具体的に記述し、四日市市の事例と重ねた。

### ◎屋敷と家屋のまじなひに

屋敷を設ける、家宅をたてる、そうした人生の大事にどのようにまじなひ世界がかかわるかを、地鎮、鎮檀、立柱、屋敷地取、梁渡しなどの諸段階ごとに検討し、その具体相を提示した。中世の屋敷や家宅の発掘例が増加しつつある傾向に資するための小稿である。

## ◎墳墓鎮祭祝儀の成立と展開

墳墓の造営にあたり一種の地鎮祭が執行されるであろうことは予測されるところであるが、韓国の七世紀初めの古墳、我国の九世紀初めの火葬墓にその実例が見られることを指摘。相互の比較、地鎮祭や鎮壇の際の鎮め物を対比、日韓同根の祝儀を復原した。

## ◎城とまじなひ

従前、城郭や兵乱にともなうまじなひは等閑視されてきた。東北大学所蔵の呪法書などを用いて城郭をめぐるまじなひの種々相、戦乱時のまじなひの種々相を示し、この世界にもまじなひが色濃く息づいていることを明らかにし、まじなひのもつ意味を提示した。

本書に取載した論考は、昭和四十九年（一九七四）から昭和六十三年（一九八八）にかけて執筆されたものである。昭和四十九年と言えば、十月に大阪府教育委員会を退職し、文化庁文化財保護部記念物課調査官に転職された年である。文化庁での四年間は全国を駆け回り、各地で重要遺跡の史跡指定を実現し、斬新な視点と着想で調査の指導をされる

すがたは、考古学のテクノクライトと評された坪井清足先生をして「あの小軀に、よくもかくまでの学問と行政手腕を秘めているのか」（『続文化財学論集』序文）と語らせる活躍ぶりであった。そして昭和五十四年（一九七九）には、奈良大学に全国ではじめて新設された、文化財学科の教員に就任されたのである。

大学での教育と研究の成果は、卒業生の多くが文化財専門職の道に進んでいることにも表れている。筆者もその一人であるが、先生の指導を受け、今も文化財の世界に身を置き、さまざまな立場で取り組む者は北海道から沖縄までほぼ全国に広がっている。そして平成六年（一九九四）には奈良大学学長に就任され、二期六年の間、お務めになられている。

さて、水野先生とまじなひ世界の資料との出会いは、昭和三十六年（一九六一）五月に元興寺仏教民俗資料研究室（奈良市）で担当された、元興寺境内の発掘調査とその出土品および本堂・禅室の解体修理で発見された、膨大な仏教民俗資料に触れたことに始まる。元興寺ではまじなひ資料だけでなく、当時の住職・辻村泰圓師との出会いが後の人生

を大きく左右するものとなった。その一つが、奈良大学教員への就任である。辻村泰圓住職は一時期、奈良大学の理事長を兼務しておられ、その時に日本で最初となる文化財学科創設を着想された。そして実現に向けてご尽力されるなか、水野先生には「設立の暁にはどこに居ても奈良大学に来て教壇に立つてほしい」と約束されていたと聞く。昭和五十四年の開設直前に残念ながら辻村泰圓住職は急逝されてしまったが、当時の約束を果たされ文化庁を退職し、奈良大学文学部文化財学科助教授に就任されたと聞いている。その後も縁もあつて長く元興寺文化財研究所の評議員をお務めになり、晩年には所長に就任され、現役のままお亡くなりになるまで、元興寺への想いはそれはそれは深いものがあつた。

このような背景を知るとき、水野先生とまじなひ世界の結び付きは必然であるかのように思ってしまうのは私だけではないだろう。しかし、決してそれだけには留まらず、若き日に発表された縄文の集落論は当時の考古学に大きな影響を与えるものであつたし、埴輪芸能論も形象埴輪の意義を古墳上で復元的に考察して注目された。後期古墳の群

集墳論も、墓道を設定して多くの古墳を有機的に結びつけて説明しようとする試みは斬新であつた。他にも新しい切り口で数多くの論考を発表し続けられた。その内容には、後のまじなひの世界論の前段階を感じさせる精神を説いた内容のものも含まれ、論文を通じて具体的に人の心や人の動きを描こうとしたことがよく理解できる。水野先生の論考に一貫して見えるのは、考古学を通して、そういう人の心根を読み取ろうとするものであつた。

考古学によるまじなひ世界の研究は、前人未到の世界でもあつたことから、読み通すにはかなり難解な部分もあることは否めない。しかし通読するとそこには、古代や中世に生きた人々の存在を感じていただけることに間違いはない。

(大阪大谷大学文学部教授)